チェチェン国における緊急医療活動に参加

←えがりて　108号から

プログラム調整員としてAMDA（アジア医師連絡協議会）からチェチェンに派遣されていた赤阪陽子さんが、6月1日帰国した。AMDAは、チェチェン国内避難民を対象とする援助活動を行った多くのNGOの中で唯一のアジア国籍のNGOである。赤阪さんは、昨年5月から同プログラムに参加し、ネパール人の医師と共に医療活動を行った。

赤阪さんは、コロンビア大学院国際関係学科にて「人権及び人道」について学んだ後、旧ユーゴースラビアにおいても難民援助活動を行うなど、幅広い活躍を続けている。

時の法令　6/15　から

平和を求める心とは？

高橋（たかはし）　央（ひろし）

この四月は、AMDAの活動で残念なことが幾つか起こり、平和探求の難しさを考えさせられた。

チェチェン共和国での列車を利用した移動診療による救援活動は、ドダエフ派とロシア軍の戦闘の激化と治安の悪化、それに国連機関の部分撤退のため、スタッフが現地を離れた。

五年前から続けてきたカンボジアの郡病院再建プロジェクトは、ポルポト派の残党やギャング団の襲撃が現場で頻発しているため、やはり保健医療スタッフが活動中断を決意した。

特にカンボジアのプロジェクトの方は、UNTACによる総選挙前の緊迫した状況の中で、私自身もプロジェクトの立ち上げに奮闘したので、この決断は本当に残念でならない。

人道援助関係者は武装しないから、紛争事態が悪化した場合、私たちは実に惨めで、ときには無責任な対応をしなければならなくなる。緊急人道援助活動をやむを得ず中止すると、単に被災民に援助が届かなくなるだけでなく、人材の育成や施設の整備といった、保健医療システムの構築が中断ないしは後退することもある。

あらゆる破壊行為が、空しさや憎しみといった、人間の最も醜い感情しか残さないことが多いのを、私たちは否応なしに感じさせられる。

カンボジアでの活動には、AMDAカナダ支部の英国人の友人と一緒に参加した。彼の生まれは旧英領マラヤ連邦のペナン島で、大英帝国の植民地時代に幼少を過ごした英国紳士である。そんな彼と現地で対立したことは、UNTACの武力不行使の姿勢であった。「明石は国連の理想ばかり口にして、ポルポト派の襲撃には何もできないじゃないか？　完膚なきまでやつらを打ちのめす勇気がどうしてないのか？」という意見を、多くの白人から耳にした。この場合、彼らのいう勇気とは、カンボジアに正義と平和を打ち立てるために、武力による犠牲をあえていとわないという強い意思、ということだろう。現に私たちは白人のこうした考え方を、最近ボスニアで見せつけられた。

これに対し、有色人種の人たちはおおむね明石特別代表のやり方を支持していた。ソマリアでのPKOの難しさを目のあたりにしていたし、何といってもアジアの問題はアジア人のやり方が一番、といった先入観があったことはいえよう。

だから今、現場に入っている彼から、苦汁に満ちた活動停止を決意するまでの状況報告を読むと、四年前のあの議論が私の脳裏をよぎらずにはおかないのである。

歴史は繰り返すというし、また、人々の心は振り子のように両極端の間を行き来する。

五〇年前アメリカは、「最小限の犠牲で、日本帝国主義を完全に破壊するため」に、わが街長崎へ原子爆弾を投下した。確かに帝国主義は壊滅したが、犠牲は決して小さくなかった。その功罪については、今日でも意見が対立している。

六年前、サダム・フセインがクウェートを侵攻した際、連合軍はイラクへの反撃をめぐって、バクダット進撃を主張するシュワルツコフ司令官と、政治決着で早期に停戦したいブッシュ大統領の意向が対立した。進撃は大統領の決断で中断され、連合軍は少ない犠牲で勝利した。しかし、サダム・フセインは失脚せず、クルド族をはじめ、多くの弱者が今も圧政と国連制裁に苦しんでいる。

今年は沖縄の米軍基地返還と絡んで、集団的自衛権を含めた日本の安全保障が活発に議論されている。この問題でも私たちの平和を求める心は、過去と未来、理想と現実の間をさまよい続けるのであろうか？

（AMDA日本支部副代表＝熱帯医学）